



Title	韓日王権神話の比較研究
Author(s)	魯, 成煥
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39095
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	魯成煥
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第11481号
学位授与年月日	平成6年6月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科 日本学専攻
学位論文名	韓日王権神話の比較研究
論文審査委員	(主査) 助教授 小松 和彦 (副査) 教授 子安 宣邦 教授 都出比呂志

論文内容の要旨

従来の日本と韓国の古代神話の比較研究は、双方の類似点に着目することによって文化史の復元をはかるという伝播論的な研究が主流を占め、構造論的視座に立った比較研究はほとんどなされてこなかった。本論文は、日韓の古代王権神話とくに王権の始祖の出自と婚姻に関する神話を文化人類学的視点から分析し、その類似と差異を明らかにすることを通じて、それぞれの神話における王権の「正統性」の根拠を解明しようとしたものである。本論文は、A4判総頁数94頁(400字詰原稿用紙約282枚)で、6章から構成されている。第一章では韓国と日本における日韓比較神話研究の概観、分析対象、方法などを述べ、第二章と第三章では日本神話の分析、第四章と第五章では韓国神話の分析を行い、終章で考察結果をまとめている。

第一章では、韓国と日本の比較神話研究の研究史を概観し、分析の対象、方法などを提示する。韓国における日本神話の研究は日本神話の源流が韓国にあることを説き、それによって韓民族の優越性を強調しようとする傾向が強く、科学的研究がまだ充分に展開されていない。これとは異なり、日本の神話研究では、歴史学や国文学、文化人類学、考古学などの豊富な研究成果に基づき、古代日本と古代韓国の文化交流によって韓国神話が日本神話の成立に利用された可能性が指摘してきた。著者はこうした研究の状況をふまえつつ、日本、韓国いずれの側の研究も神話の類似性を重視してきたことを指摘し、具体的分析対象である王権の始祖の出自と婚姻(創設婚姻)をめぐる神話の構造分析にあたっても、類似のみでなく差異についても相応の配慮をした上で物語の基本構造の把握・考察が必要であると説いている。人類学では、王権の成立を考える場合、外来の最初の王が誰と結婚するかを重視しているが、著者もその点に注目する必要性を強調している。

第二章では、主に『古事記』によりながら日本の王権神話として重要な位置を占める出雲神話(スサノヲとオホクニヌシの神話)と日向神話(ニニギとホヲリの神話)を取り上げ、その構造の類似を考察する。スサノヲとニニギとともに〈天〉から地上に降臨した支配者で、しかも〈地上〉の女(クシナダヒメとコノハナサクヤビメ)と婚姻している。さらにその後孫であるオホクニヌシとホヲリがともに他界訪問を行い、訪れた先の〈他界〉の女(スセリビメとトヨタマビメ)と婚姻し、そのあいだに生まれた子が王権の継承者となる。著者はこの二つの点を合わせもったと

ころに日本の王権神話の基本的特徴が見られるとする。

第三章では、出雲の国譲り（オホクニヌシからタケミカヅチへ）の神話と大和の国譲り（ニギハヤヒから神武へ）の神話を取り上げる。出雲の場合、〈他界〉に由来する妻方の外部性は確保されるが〈天〉からの出自が希薄なオホクニヌシから、〈天〉から降臨したタケミカヅチたちに出雲の支配権が移譲される。これに対し、大和の場合では、支配者の正統性を〈天〉から降臨したことだけに求めているニギバヤヒは、神武に国譲りを強いられる。神武は後にオホモノヌシの娘と結婚する。

著者はこうした相違および第二章の考察から、おそらく大和系の王権の支配が確立される以前の諸地域の王権神話には、少なくとも「天降り」のモチーフを持たず、支配者の地下や海底などの異界への訪問とその国の女との結婚の物語を語ることで支配者であることを正当化していたようなタイプと、「天降り」だけの物語を語ることで自足していたタイプの、二つのタイプの神話があつたのではないかと推定する。すなわち出雲神話にうかがわれるよう、土着の王権神話の「他界（地下界）訪問」のモチーフに「天降り」のモチーフを接合することによって、日本神話は天孫降臨と他界訪問の二重構造をそなえた独特の主権神話となつたのである。著者が日本神話の特徴としてとくに注目するのは、このうちの「他界訪問」である。

第四章では、古代朝鮮半島に起つた、古朝鮮、高句麗、新羅、伽耶の建国神話を取り上げ、王権の始祖の出自と婚姻（創設婚姻）に着目した考察がなされる。古朝鮮の最初の王・檀君の出自には、檀君を天帝の子・桓雄と熊（女）の子とする神話と、桓雄の孫娘と檀樹神の子とする神話の二種類の神話がある。前者は始祖王の父の出自を〈天〉に、後者は王の母の出自を〈天〉に求める。著者が注目するのは、日本神話と同様、支配者は〈天〉から降臨して来るが、日本の神話とは異なり、支配者の一族と婚姻する者が〈地上〉の者ではなく、熊や檀樹という自然神であるという点である。古朝鮮の場合、王権を成立させる〈天〉と〈自然〉との婚姻関係は、父（夫）方と母（妻）方が入れ換え可能になっている。しかし三国時代の神話になると、高句麗の始祖王・朱蒙は天帝・解慕漱と河伯〈水神〉の娘・柳花の婚姻によって生まれた子であり、新羅の始祖王・赫居世は天から降臨し、井戸から現れた鶴龍の左脇から生まれた女と結婚し、伽耶の場合も、天から降臨した首露王と阿愈陀国から海を越えてやってきた女と結婚しているというよう、夫（父）方が〈天〉、妻（母）方が〈水界〉に固定している。新羅の神話では、新羅の前身となる辰韓の六つの村の支配者が、いずれも〈天〉から降臨した者の子孫とされているにもかかわらず、その中から辰韓を統一する者が現れず、その後に〈天〉から降臨して来た赫居世が六つの村の統一者となったという。著者はこの記述に着目し、〈天界〉との関係だけでは不充分でさらに〈水界〉などとの関係を強調することが、古代韓国の王権に要求されていたと解釈する。すなわち「来訪」してきた者同士が婚姻しているわけである。

第五章では、これまでの王権の正統化をはかる内容の神話と異なり、それを変形・逆転したような物語構造を示している後代の後百濟の王権神話を、同時代の高麗の建国神話と比較しつつ構造分析を試みる。高麗は、神話上の始祖の虎景が「虎」に見初められて山神になり、人間の女のところに通つて康忠を生ませた神話と、その四代目の子孫作帝建が龍王の娘を妻としたことを語る神話を、建国神話の中核にすえている。この神話には、始祖の出自が〈天界〉から〈山〉へ、その婚姻の相手が〈水界〉の女から〈地上〉の女に変換しつつも、なお王権の神聖性を〈山〉と〈水界〉の二つの外部に求めようとする神話論理が働いている。ところが、後に高麗に征服される後百濟の王・甄萱は、長者の娘のところに夜毎やつて来た「みみず」の子で、「虎」の乳を飲んで育ったという。これについて著者は、後百濟の建国神話では「龍」と「虎」の双方の出自関係を強調する神話であったものが、後に征服者側に立つ者によって改変され、その結果「みみず」と「虎」の結合という均衡を欠いた創設婚姻という王権の神聖性や正統性を弱めた内容になっていると解釈する。前章までの考察をふまえ、従来の説を批判的に検討しつつ物語構造の変換の実態を提示しており、本論文でもっとも興味深い箇所である。

終章「結論」では、これまで分析してきた日韓の神話の類似性と差異性のまとめと、その双方を視野に収めた上で、日本と韓国の神話に現われた両国の古代の文化交流とそれぞれの国家形成の過程などの地域的特性の把握の必要性などを説き、今後の研究課題を述べている。

論文審査の結果の要旨

本論文の成果は、次の3点にまとめられる。

評価すべき第1点は、文化人類学の方法に基づいた新しい視点を導入することで、日本および韓国神話の構造を分析したことである。韓国における韓国および日本の神話研究は民族主義的色彩が強いものが多い。また、文化人類学が韓国の学会に導入されて日が浅いため、人類学的方法を用いての神話研究はまだそれほど進展をみせていない。このような状況において、日本人研究者経由とはいって、M.サーリングの「外来王」理論や人類学の説話構造の分析方法、異類婚姻説話の研究成果を用いて、日本と韓国の古代神話を比較し、それぞれの独自の論理構造の抽出を試みたことは、先駆的な意味をもっている。

評価すべき第2点は、日本における日本神話の研究成果の膨大さに圧倒され、小さなテーマに的を絞つたいわゆる重箱の隅をつくような研究になりがちなこの分野で、日本と韓国の双方にわたって多くの文献を幅広く涉獵し、王権の始祖の出自と婚姻をめぐる説話の構造の分析という大きな枠組みでの比較を試みていることである。その結果得られた、日韓神話の共通性としての〈天〉からの出自は従来から指摘されていることであるが、日本の王権神話にみられる「正統性」（優越性）の特徴の一つとして、「他界訪問と異類婚姻の組み合わせ」を析出したことは、日本の説話研究者にはそれがありふれた説話の1タイプと思われているだけに興味深い。「他界訪問」のモチーフについては、これまででもシャーマニズムや通過儀礼などとの関係が指摘されている。しかし韓国の神話や説話にこのモチーフが少ないと著者の指摘は、今後検討してみるに値する課題である。

評価すべき第3点は、後百濟の王・甄萱をめぐる神話の新解釈である。著者は勝者の側の高麗神話が神聖さを強調するために〈天〉の変形である〈山〉の精霊と、〈水界〉の精霊の双方の出自を説いているのに対して、敗者にあたる甄萱の建国神話では〈水界〉の精霊の表象が「みみず」になつていている理由を、勝者の側に立つ者が甄萱をいやしめるために本来の物語構造に変形を加えたと解釈している。この解釈は、日本と韓国の王権神話の論理構造の分析結果と当時の歴史状況の双方をふまえた考察となっていて、説得的である。

以上、本論文のすぐれた諸点を列挙したが、その一方では問題点も認められる。その1は、参照した文献があまりに多く、そのすべてが充分に使いこなせていない点である。とくに日本神話の解釈に際し、神話の物語としての構造と、古代王権成立の歴史過程の峻別が不充分である。構造分析を意図しているとはいって、歴史学や考古学の成果をも吸収した裏付けがなされていない点が惜しまれる。その2は、人類学の成果の吸収がまだ不充分なため、多くの文献を涉獵してはいるものの、著者の主張が最善の状態に整理、論述されているとはいがたく、その意図するところを汲み取りにくくしているきらいがある点である。その3は、日本神話と韓国神話の比較研究としながらも、その関心が韓国神話の理解を深めることに置かれているため、比較を通じて浮かび上がって来た差異がそれぞれ何を語っているのかをくわしく論じていないことである。しかしながら、こうした不充分な点があるものの、本論文に一貫して流れる説話の構造比較研究へのひたむきな姿勢は注目に値するものである。今後の研鑽によってこれらの問題点の克服を期待する。

以上のように、本論文は、従来のこの分野の研究に新しい視角を提示しているのみならず、日本の文化人類学の神話・説話研究方法を韓国に導入することで韓国の民間説話についても新しい研究領域を切り開いており、両国の学者間の活発な議論を喚起する契機となるだろう。

本審査委員会は、博士（文学）の学位を授与するに値するものと認定する。